

見慣れた通学路を歩き、見慣れた校門を通過し、見慣れた教室へと足を踏み入れる。五年一組の教室には、すでに半数以上のクラスメイトが登校していた。朝のホームルーム開始までの時間を考えれば、妥当な登校率だろう。

「おはようございます」

「あ、タカチホさん。おはよう」

「ちょっと休んでたけど、（機獣少女）のお仕事だったの？」

入口の近くでおしゃべりをしていた女子のグループに挨拶（あいさつ）をすると、そんな返事が返ってきた。

「はい。しばらく家にも帰れなかったので、学校もお休みしてしまいました。私が休んでいる間、何かありましたか？」

「ううん、特にないよ」

「来週、算数のテストやるって言ってたくらいかな？」

「そういえば、来月から体育はプールだから、水着の用意をしておくようになって」

私の質問に口々に答えてくれるクラスメイト達。私がない間も、小学校の方は問題も起こらず、平穩無事だったらしい。

彼女等に礼を言い、私は自分に割り当てられた机に向かう。途中、別のクラスメイト達とも挨拶を交わし、机に着く頃にはホームルーム開始の時間になっていた。担任教師が現れ、日直の号令で朝の挨拶をし、出欠確認が済むと、それで終わりだ。特別な連絡は帰りのホームルームで伝えるのが普通なので、朝は出欠確認がメインと言ってもいい。

朝のホームルームが終わると、一時間目の授業開始までわずかな時間が空く。五分ほどしかないので、トイレに行く訳でもなければ、基本的に教室を出ていく生徒はいない。わざわざ席を離れておしゃべりに興じる者はわずかで、ほとんどは授業の準備をして席に着いている。私も同様で、時間割表を確認して、該当科目の教科書やノートを机の上に準備する。今日の最初の授業は国語だ。

——はし。

すると私の机に、少し乱暴にノートが置かれた。もちろん、私が置いた訳ではない。ノートから視線を上げると、持ち主であろう少女が私の視界に入った。

クラスメイトの中では抜きんでて小柄で、平均身長の子より頭一つ分くらい小さい。小柄な体格に似つかわしい、可愛らしい顔立ちをしているのだが、その可憐な容姿に反して、彼女はかなり気が強かったりする。

「おはようございます、ヒノカゲさん」

彼女の名前はスミレ・ヒノカゲ。私のクラスメイトで、五年一組の委員長でもある。

前述の通り、見た目は小柄で可憐。成績も優秀で、委員長としてクラスをよくまとめてくれている。その反面、気が強いので誤解されやすく、彼女と同じクラスになった事のない同級生からは『暴君』だと思われている節がある。

「……ええ。おはよう、タカチホさん」

だが、こうして私を見下ろしている——いくらヒノカゲさんが小柄でも立っていれば、椅子に座っている私より目線は高い——彼女の態度を見れば、それも致し方ないと思う。気の弱い者であれば、睨まれていると感じてもおかしくない。

私も最初は、嫌われているのだと思っていた。彼女が私に接する際の態度は、いつも刺々しかったから。

しかし、彼女から何か嫌がらせを受けた事はなく、むしろ、私を助けてくれていた。この少し乱暴に置かれたノートもそうだ。手に取り、中身を検める。そこには私が休んでいた間の授業の内容が、綺麗な字で、しかも判りやすくまとめられている。

「ノート、いつもありがとうございます。これで来週の算数のテストも、良い点が取れそうです」

「……ふん。そんなのなかったって、タカチホさんは満点を取れるでしょ」

私のお礼に、ヒノカゲさんはいつも通りそっぽを向き、ぶっきらぼうに答えた。最初の頃は、私の言葉が社交辞令に聞こえてしまい、機嫌を損ねてしまったのだと思っていた。

けど、今は違くと判る。よくよく見れば、ヒノカゲさんの頬は薄っすらと紅潮しているし、口角が上がりがりそうになるのを必死に抑えてびくびくしている。いっそ、『そうでしょ？』もっと感謝してくれてもよくなってよ！』とか言って、高笑いでもしてくればいいのにと思う。その方が、周囲から変に怖がられずに済む。別のキャラ付けをされてしまうかもしれないので、本人には言えないが。

「そんな事ありません。それに勉強の事だけでなく、学校で私が孤立せずいられるのも、ヒノカゲさんがこうして話しかけてくれるからです」

〈機獣少女〉といえど子供だ。〈カタストロ〉の脅威から人々を護るのも大事だが、彼女等にも人としての生活がある。〈機獣少女〉でいられる時間は長くなく、将来的には何かしらの職業に就いて生きていかなければならない。そのために義務教育は必須と言える。だから学業を考慮した待機シフトが組まれるが、急な呼び出しは珍しくない。つまり、授業を受けられなくなる事が多々ある。それについては学校側も最大限の便宜を図ってくれるが、授業の遅れを取り戻せるかどうかは結局、本人次第だったりする。

そして、学校は集団行動やコミュニケーションを学ぶ場所でもある。『社会の縮図』が其処には確かにあって、孤立した者は肩身の狭い思いをして生活しなければならなくなる。子供というのは残酷なので、陰湿な大人のそれと違い、判りやすくいじめに発展する。それに対して、『機獣少女』の『物理的な威力』など、何の役にも立たない。『数の暴力』の前に、社会性の動物である人間は無力だ。

個人は集団に勝てない。

「だから——ありがとうございます、ヒノカゲさん」

「……………そう」

私が重ねてお礼の言葉を告げると、ヒノカゲさんはそっぽを向いたまま、不機嫌そうに答えた。

そうこうしているうちに始業を告げる合図が放送を通じて流され、席を離れていた生徒達も自分の席に戻っていく。ヒノカゲさんは私に何か言おうとしていたが、担任教師の姿を認めると、しぶしぶ自分の席に戻っていった。

やがて日直の号令と共に一時間目の授業が始まる。私にとって約二週間ぶりの学校生活は、こうして幕を開けた。

だが、この二週間の出来事が大きかったせいか、私は舞い戻った日常に順応しきれい
なかつた。先生の授業を上うわの空で聞きながら、ふと窓から見える景色を眺ながめる。

抜けるような青い空。風が吹き、白い雲が流れ、二つの真昼の月が浮かんでいる。

そう、私は帰ってきた——故郷である惑星ゼヘナに。

サイドストーリー #09

『違う空の下で（前編）』

目眩にも似た一瞬の違和感。周囲を見渡すと、一帯が大惨事となった夜の駐車場。先ほどまでいた、巨大な図書館のような空間ではない。幻覚だったのか、実際に異空間に行っていたのかは判らないが、通常空間に復帰したのは間違いない。

ただ、フィルターがかかったように、周囲一帯が紅い色を帯びていた。やみひめさんがクラウさんに対して能力を発動させた際に、この現象が起こったのは覚えている。

では、クラウさんは？

「——ツバキ！」

自分を呼ぶ声にはつととして、私は声の主に向顔を向ける。やみひめさんが、脱力しきつた様子のクラウさんの身体を支えて、「〈カタストロ〉を！」と続けて叫んだ。彼女の視線の先には、不定形に蠢く液状の物体——〈カタストロ〉だ。地球に来て、形状変化を起こしたその姿は、いわゆる『スライム』と呼ばれる存在に近い。私がMBコアに不調を来たしたように、〈カタストロ〉にとっても、この星には本調子でいられなくなる要因があるのかもしれない。

なんにせよ、クラウさんから〈カタストロ〉を切り離すのには成功したようだ。あとは——滅するのみ。

しかし——

「ツバキ!？」

その場から離脱しようとする〈カタストロ〉に対し、私は動けずにいた。筋力が強化されているとはいえ、クラウさんとは体格差があるため、やみひめさんは意識がないであろう彼女の身体を支えるのに気を取られ、自由に動けない。このままでは逃げられてしまう。

それでも私は迷っていた。〈カタストロ〉の真実、〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣のコアの願い、真相を知りつつ公表していないという上層部への不信。それらを思うと、自分の行動に自信が持てなくなる。

〈機獣少女〉として〈カタストロ〉を滅するのは正しいのか——と。

〈カタストロ〉も言っていた。適度な脅威があり、それを払いのける力があり、そうして私達の世界は安定している。私達〈機獣少女〉は、部品だ。世界を安定して動かす歯車の一つ。それが考える必要はない。考えるのは歯車の仕事ではない。歯車はただ部品としての役割を果たすだけでいい。

だけど——私は人間だから、余計な事を考えてしまう。

〈カタストロ〉を滅するのは、本当に正しい行為なのか。

「……………」

判らない。どうしたいのか、どうすべきなのか、それすら判らない。

このまま〈カタストロ〉を逃がしてしまえば、またクラウさんのような被害者が生まれる。だが、そもそも〈カタストロ〉自身被害者ではないか？ それと戦っている〈機獣少女〉達も、こうして地球に跳ばされた私も。

何が正しい？ 誰が悪い？ 本当に滅するべきは……？

私の頭の中がぐちゃぐちゃになっていると、〈カタストロ〉が大きく跳躍した。このままでは逃げられるか、人の多い場所に出してしまう。やみひめさんは、駆け寄ってきた橘さんにクラウさんを預けようとしているが、恐らく間に合わない。今、私が動かないと。

でも、それでも――

「アーア・フレッチェ――撃ち抜け！」

「!？」

突如、私でもやみひめさんでもない少女の声が響いた。

直後、眩い閃光が夜の闇を切り裂き、〈カタストロ〉を直撃した。恐らくは光学兵器――荷電粒子砲に準じる高出力の砲撃だ。

砲撃手は近くにいた。ほんの数メートル先に横転していた普通車、その上に立っていたのは、ギターのような長い板状の何かを持った少女。年齢は私ややみひめさんと年代代か、少し上くらいに見える。全身を覆う黒いマントと、同様に黒い、つば広のどんがり帽子を被ったファッションは、魔法使いというより『魔女』を思わせる。手に持っているのは、先ほどの砲撃を行った長砲身のライフルなのだろうが、この格好を見ると魔女が乗る箒にも、魔法の杖にも見えてくる。

「よつと」

魔法の少女――なんだか変な表現にも思えるが――が、地面に軽やかに降り立ち、私のすぐ横に並んだ。同時に、百メートルほど先の地面に〈カタストロ〉も落下した。

まだ動いている――生きている。

「――迷ってるね」

少女の声に、私は〈カタストロ〉に向けていた視線を戻した。なぜだろう、正体が判らない以上、彼女も警戒すべき対象のはずなのに、私は警戒心を抱けずにいた。

「でも、ごめんね。わたしは、あなたに何も言ってあげられない」

言うと、少女が持っていたライフルが、彼女の羽織るマントの中に消えた。魔法のように。

「わたしに出来るのは、あなたが決断するまでの時間を稼ぐ事だけ」

少女が、黄玉トパーズのような黄色い瞳でウインクをすると、茶色のショートヘアがふわりと揺れた。私に向けられる少女の笑みは、勝手気ままで、だけど人懐っこい、猫を思わせるものだった。

「ドウエ・スパード」——頭エグゼキュートれよ！」

少女が叫ぶと、最初から持っていたように、その両手に短い剣が握られていた。長さは左右で微妙に違い、長い方が刃渡り約五十センチ、短い方がマイナス十センチといったところだろう。刀ブレイドのような刃が付いており、鈍い白銀の光沢を放っている。

やはり魔法のようだ。もつとも、魔法が両手に短刀——いや、小太刀ショート・ブレイドか——を持つ姿というのは、かなりミスマッチな気もするが。

少女は今度は何も言わず、視線だけで私に『がんばって』と声援エールを送ると、落下した（カタストロ）に向かい駆け出した。

「……………」

私うしろがその後姿を黙って見送ると、やみひめさんが駆け寄り、遠慮がちに声をかけてきた。

「ツバキ、大丈夫？ 身体からだはなんともない？」

「……はい。すみません、私、何も出来なくて——」

「ううん。大図書館での〈カタストロ〉の話、シヨックだったよね……」

「……………」

やはり白昼夢たぐいの類ではなかった。やみひめさんも、あの空間での出来事を体験している。

「あの女の子、知り合い？ 〈機獣少女〉なの……？」

『——違うな』

やみひめさんの問いに答えたのは私ではなく、今は弓型に形態を変えたMBデバイスの〈カグツチ〉だった。女声を思わせる時代があった機械マシン・ヴォイス音声で、彼女は続ける。

『あの少女からはMBコアの反応を感じなかった。MBデバイスも持っておらん』

「じゃあ、地球でもすでに魔法少女みたいな技術が開発されてたって事!？」

『それも違うだろうな。なんとなくだが、あの少女はこの世界の住人とは違う気がする』
〈カグツチ〉の否定的な意見に、まるでヒーローが実在したと言わんばかりの興奮を見せていたやみひめさんのテンションが一気に下がった。

「この世界の住人でないなら、私のような異邦人という事ですか？」

『恐らくはな。だが、ゼヘナの人間でもない……』

「何か気になる事でも？」

普段からはつきりとした物言いをする（カグツチ）に、歯切れの悪さを感じて私は訊ねた。

『不思議と、私はあの少女を知っている気がするのだ』

「……………」

（カグツチ）の言葉を聞き、私は件の少女を視界に収めた。液状の自分の身体の一部を、散弾のように撃ち出す（カタストロ）の攻撃を軽やかに躲し、接近しては両手のショート・ブレイド小太刀で斬撃を叩き込み、即座に離れる。いわゆる一撃離脱戦法を繰り返している。その光景はまさに『蝶のように舞い、蜂のように刺す』といった表現そのままだ。その攻撃を数回繰り返すと、両手に持っていた二振りの剣が、先ほどと同じように少女が羽織っているマントの中に消えた。

「ヘーレ・アルコ——頭れよ！」

少女が叫ぶと、その手にはもう長砲身のライフルが握られている。やはり、最初から手に持っていたように。

しかし、ライフルでは威力が高すぎると判断したのだろう。それをマントの中に収納すると、次の瞬間には短砲身の二連装ライフル——短めの銃身から言ってカービンだろう——を手にしていた。

長砲身のライフルと同じように腰ために構えたりはせず、比較的楽な姿勢で、左手は砲身の下に添える程度。

「フエーデ・フレッチェ——汝に救いを！」

二つの銃口を（カタストロ）に向け、言葉と共に少女がカービンの引き金を引く。上下の銃口から交互に撃ち出される光線の威力は、先のライフルによる砲撃とは比べるべくもないが、扱いやすさで言えば間違いでこちらが上だろう。切り詰められた銃身はコンパクトで、使い手の動きを阻害しないし、高すぎる威力は周囲の被害が甚大になり、迂闊に撃てなくなってしまうからだ。

攻撃を斬撃から射撃に切り替えてからも、（カタストロ）に致命傷は与えない。あくまで、その場に釘付けにするだけだ。劣勢に陥っていた訳ではなく、斬撃では倒せないと思っただ訳でもなく、装備を近接用から射撃用に戻した理由は、単純に斬撃に飽きてしまったからなのだろう。あるいは飛び道具の方が得意なのかもしれないが。

ライフルとカービン。『二つの弓』という呼称からして、恐らくまだ見せていない武器があるのだろう。

「すごいね、あの子……………」

やみひめさんが感心するのも頷ける。少女の動きは、戦闘中とは思えない、緊張感を

まるで感じさせない軽やかさだからだ。危なげなく〈カタストロ〉の攻撃を躲し、的確にダメージを与えていく。

しかしその様子は、飼い主にじゃれつく可愛らしい子猫のようであり、見ようによっては鎖に繋がれた大型犬を、届かない距離からおちよくって楽しんでいる性悪猫にも見える。

「……全然そんな風には見えないけど、もしかして性格悪いのかな？」

やみひめさんも私と同じ印象を持ったのだろう。自分の意見を否定してほしそうに、苦笑気味に私に振った。

私が答えてに窮していると、会話が聞き取れているはずもないのに、少女は『そんな事はないよ？』といった表情をこちらに向けた。

その笑顔がとんでもなく——あざとい。

そうこうしている間にも、少しずつ、しかし確実に〈カタストロ〉の身体は削られ、動きも緩慢になりつつある。このまま任せておけば『時間稼ぎ』どころではなく、あの少女が私達に代わって滅してくれるだろう。

それならそれで構わない。〈機獣少女〉の仕事は〈カタストロ〉の殲滅ではなく、その脅威から人々の生命と財産を護る事。誰が滅するかは問題ではないのだから。

だけど——『それでいいのか？』と問いかけてくる自分がいる。恐らく私はゼーナに帰れない。〈機獣少女〉として戦う事はもうない。これが最後であるにも関わらず、共に地球に跳ばされた〈カタストロ〉に、私が引導を渡してやらなくていいのか？

「……………私は——」

「ツバキ？」

「私は、あの〈カタストロ〉に対して、共感のようなものを感じていたのかもしれない」

これは恐らく、共に異常事態に巻き込まれた事による、奇妙な連帯感や仲間意識に近い感情。

「論理的な思考でないのは判っています。だけど、あの〈カタストロ〉は、せめて私の手で葬ってあげるべきではないか——そんな風に考えてしまっています」

『……ふむ。そうだな、ツバキの言う通りかもしれない』

〈カグツチ〉は機獣だ。人間などよりも、『戦い』というものを純粋な行為として捉えている節がある。敵であっても、死力を尽くして戦った相手に対しては敬意を払う——それは戦士としての矜持。

だからこそ、今の私の気持ちも理解してくれているのだろう。

「戦えるの……?」

「これは私の役目だと思うんです」

私を気遣うように訊ねてくれたやみひめさんに、そう答える。

「それに、今やらなかったら、きっと後悔する気がします。だから——」

〈カグツチ〉をすつと胸に当て、宿敵を見据え、高らかに宣言する。

「ツバキ・タカチホ、〈機獣少女〉として——推して参ります!」

こういう外連は私には似合わない。だけど、こうでもしないと雑念が入ってしまうから。

宣言通り、私は駆け出す。

考えるな。

今は自分が思うように行動しろ。

後悔なら後でいくらでもすればいい。

私の姿を認めると、〈カタストロ〉を釘付けにしてくれていた少女が、自分の姿を隠すようにマントを翻し、その場から姿を消した。マントの中に吸い込まれ、マント自身も内側に吸い込まれてしまった。手品か、やはり魔法のように。

私が決断するまでの時間稼ぎをしてくれた少女に、内心でお礼を言い、機力の弾丸をスリッパースト三点射撃。〈カグツチ〉から放たれた三発の弾丸は、致命傷には至らないが、相手の動きを封じたり、牽制するのに適している。実際、先ほど放った射撃によって〈カタストロ〉は身体を削られ、体勢を崩し、離脱も迎撃も出来ないでいた。

「〈カグツチ〉!」

『心得た!』

〈カタストロ〉が苦し紛れに身を削った散弾を放つ。だが、それらは悲しいほどに明後日の方向に逸れ、回避するまでもない。私は一気に懐に跳び込み、〈カグツチ〉の下端——弓で言えば弦を結ぶ部分——を突き立てる。

液状とはいえ、〈カタストロ〉の身体は粘度が高く手応えもある。痛みを感じているのか、頭を潰された蛇のようにのたうつが、私は〈カグツチ〉をより深く突き刺して逃がさない。変わり果てた姿になったとはいえ、〈カタストロ〉も生物だ。生命の危険を感じれば、死にたくないと抵抗する。

それは生物として当然の反応。

もがき、足掻き、最後の瞬間まで生きようとする。

〈カタストロ〉もそうなのだろう。

「……あなた達に罪がないのは判っています」

『カタストロ』と呼ばれようが、それは私達にとつての話で、〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣からすれば『救い』なのだから。

「それでも、私達は戦わなければいけない……」

利害が対立し、互いに納得出来る妥協案が見つからなければ、戦争になるように。

言葉が通じない相手に生存圏を脅かされれば、駆除するしかないように。

「だから——」

こうするしかない。

「——滅せよ！」
アニヒレイト

何を言っても自己欺瞞だ。これは人間側の都合で、自分の行為を正当化するための言い訳でしかない。だからそれ以上は言わず、私は殲滅のための言葉を告げた。

——うろうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!?

耳を塞ぎたくなるような〈カタストロ〉の断末魔の叫び。

私の言葉に従い、〈カグツチ〉を通して流し込まれた私の機力が、〈カタストロ〉を滅するための『威力』に転化された結果だ。ほどなくして崩壊が始まる。生体機能が停止した〈カタストロ〉は、即座に凝固し、自重を支えられずに崩壊してしまう。

『終わったな』

例に漏れず塵と化していく、さつきまで〈カタストロ〉だったものを見下ろしていると、〈カグツチ〉が独り言のように言った。

「……………」

私はそれに答えなかった。どう答えるのが正解か判らなかったし、〈カグツチ〉も返事を期待している訳ではないようだ。

夜風が吹き、〈カタストロ〉だったものが飛ばされていく。粒子の細かいそれは、瞬く間に紅いフィルターがかかった夜の闇に溶けていく。月の光を反射し、一瞬のきらめきだけをこの世界に残して。

それはとても幻想的で悲しい光景に、私の目には映った。

「ツバキ……」

私を呼ぶ声に振り返る。

やみひめさん。今日まで私を助けて、共に戦ってくれた人。

隣には橘さんがいて、その背には、眠っているクラウさんを負ぶっている。

「良かった。皆さん、無事なんですね」

そう言つて安堵する私とは対照的に、やみひめさんと橘さんは、なぜか不安そうな表情を浮かべている。

「あの、どうされたんですか……?」

「だって、ツバキ、泣いてるから……」

やみひめさんの言葉に、私ははっとした。温かいものが頬を伝う感覚がある。手を触れると、其処は濡れていて、頬と指先を濡らしていたのは涙で――

私は確かに泣いていた。

これが何の涙なのか、自分でも判らない。

〈カタストロ〉を僣んだためなのか、命を奪った事への罪悪感なのか、どちらであつても自分勝手に変わりはない。こんなものを流す権利など、私にはないのだから。

「……なんでもありません。平気です」

涙を袖で拭い、笑顔を浮かべて見せる。

けど、それは上手く出来ていなかったらしく、余計に二人を不安顔にさせてしまった。

「――それより、この現象です。やみひめさんが意図して起こした訳ではないのでしょうか?」
自分でも泣いている理由が判らなかつたし、誤魔化せる自信もなかつたので、私は強引に話題を変える事にした。実際、この現象は尋常ではない。

やみひめさんが、クラウさんから〈カタストロ〉を切り離そうとした際に、あか紅い光が広がった。それは世界を染め、〈カタストロ〉を殲滅した今でも、視界に紅いフィルターがかかつたような状態が続いている。

「私にも判らない。〈ディバイダー分断するもの〉は対象を切り離すもので、こんな現象は起きないはず
なだけ……」

私の事を気にかけてつつも、やみひめさんは話題の変更に応じてくれた。やはりこの現象は、彼女にとつても想定外の事らしい。

「特に悪影響はないっぽいな。息も出来るし、体調にも異変はない」

背中のクラウさんを背負い直し、橘さんも意見をくれる。私ややみひめさんだけでなく、〈機獣少女〉でない人間にも変化はないようだ。

では、この現象は何なのだろう。

「〈カグツチ〉は何か判りませんか?」

『かひもく皆目見当もつかん。私の記憶と知識にある限り、初めて見る現象のはずだ』

あくまで覚えている限りだが――と付け加えたのは、〈カグツチ〉が過去の記憶を失っているからだろう。

しかし、これでは詰みだ。これ以上、私達で話し合ったところで、可能性の探り合いでしかない。それに、この場に留まり続けるのも得策ではない。戦いが終わって危険がなくなっただから、増々、人が来てしまう可能性は上がる。

「とりあえず、一旦、この場を——」

言いかけて、先ほどからやけに橘さんが、背中のクラウドさんの位置を気にして、背負い直しているのが気になった。

「あの、橘さん……ひよつとしてクラウドさんが重いんですか？」

本人が眠っているとはいえ、女性の体重の話なので、訊ねるのも気を遣ってしまう。

「いや、体重自体は軽いんだが、人一人背負ったままだと勝手が、な」

「——とか言って、本当は背中におっぱいが当たる感触を楽しんでるんだよね？」

橘さんの言葉に納得しかけた矢先、それを全否定する声が割って入った。もちろん私ではないし、やみひめさんでもない。

「……へ？ だ、誰!？」

きよろきよろと辺りを見回すやみひめさん。私も同様に気配を探る。

「此処だよ、此処」

声の主は橘さんのすぐ傍らにいた。その無邪気な様子を見ると、隠れていた訳ではないらしく、単純に私達が気付かなかっただけ——そんな気分になる。

黒いマントと、つば広のトンがり帽子という、いかにも魔女を彷彿とさせる出で立ち。突然現れ、私達を手伝い、急に姿を消してしまった、あの少女だ。

年齢は私ややみひさんより少し上くらい。中学生になったかならないくらいに見える。

ふわっとした茶色のショートヘア。猫を思わせる、黄玉のような大きな黄色の瞳。人懐っこい笑みを浮かべた表情からは、年齢相応の無邪気さが窺える。

「何時の間に……てか、勝手な事を言うな」

「えー。でも当たってるでしょ？」

「まあ、確かに柔らかいものが当たって気にはなってるが」

「そうじゃなくて、さっき『背中におっぱいが当たる感触を楽しんでる』って言ったのが、正解だよねっていう意味だったんだけどにゃー？」

橘さんと少女のやり取りを、やみひめさんが微妙に冷めた表情で眺めている。恐らく、私も似たような顔をしているのだろう。

「お兄ちゃんのえっちー。でも仕方ないよね。お年頃だもん」

「知った風な事を……おい、くつつくな」

たちばな
橘さんは自分の腰に腕を回してくる少女に対し抵抗するが、クラウドさんを背負っているため、それも満足に出来ない。

「えへへー♪」

「ちよつと!? アサトにベタベタしないでよー!」

「お兄ちゃん、なんだか良い匂いがある。わたしの好きな匂い」

「離れてっばー!」

「こら、離れる。嗅ぐな。ちよ、やみ子、お前は引っ張るな! クラウドが落ちるだろうが!」

背中と同年代——実際には違うが——の少女を背負った少年が、両脇から妹くらいの年代の、やはり少女二人に迫られている。

目の前の光景を一言で表すなら——ラブコメだ。

しかも、主人公が高校生で、ヒロインが明らかに年下という、若干、特殊なラブコメ作品。ここは空気を読んで、自分も参戦すべきかと思案してしまっている辺り、私もあまり冷静ではないのかもしれない。

そうだ。冷静であれば、橘さんの争奪戦に加わろうなどと考えるはずがない。だって、私が割り込める余地などないのだから……。

「——何をやっているのですか、ベアトリーチェ」

一向に話が進まないため、そろそろ目の前のラブコメ展開にストップをかけようと思っていると、平淡ながらも、どこか呆れを含んだ声が聞こえた。

不意に投げかけられた声の主は、私のすぐ隣にいた。あの少女と同じように、やはり最初からその場にいたような様子で、当たり前前の顔をして。

黒いマントを纏い、つば広のトンがり帽子を頭に載せた魔女のような出で立ち、明らかに先の少女の関係者か同類だろう。

こちらは高校生くらいの年齢に見える。橘さんより年下っぽいので、一年生くらいだろうか。感情の読めない金色の瞳と、緩くウェーブがかかったセミロングの銀髪の組み合わせは、どこか浮世離れた神秘性がある。

「タオ姉、人除けはもういいの?」

「はい。もう必要ないでしょう」

先の少女が気軽な調子で訊ねると、後に現れた少女は淡々とした口調で答えた。非常に対照的なテンションだが、彼女等の会話から察するに、二人は姉妹なのだろうか。

「あの、お姉さんが、此処ここに人が来ないようにしてくれてたんですか……？」
「……………」

正体の判らない相手に、恐る恐るといった様子で訊ねるやみひめさんに対し、問われた銀髪金瞳の少女は、無言でじっと彼女を見つめた。

「あ、えつと……」

睨にらんでいるといった感じではないが、年上の相手から無表情と無言で見下ろされれば、本人にその気がなくても、威圧的に感じてしまう。やみひめさんは助けを求めて視線を泳がせるが、助け舟は意外な人物から出された。

「ごめんね。タオ姉、可愛い女の子を見ると機能が止まる病やまいに罹かかってるから」

そう言つてベアトリーチェと呼ばれた少女は、何か姉——だろう、多分——の耳元で囁ささく。すると、機能が再起動したのか、姉の方がやみひめさんの疑問に答えた。

「失礼。先ほどの質問ですが、肯定こうていです。詳細はらは省はぶきますが」

やはり無表情なのだが、口調が丁寧なためか、ぶっきらぼうな印象は受けない。これが彼女の地なのだろう。そして、彼女の言葉を信じるなら、警察などの治安機構や、野次馬すら現れなかったのは、彼女のおかげという事になる。

「貴女あなた達はいい——」

当人達を除く、この場にいる全員が持っているであろう疑問を私がぶつけた。場合によっては危険な問いだ。彼女等が、自分達の存在について詮索せんさくされる事を極端に嫌つて、一触即発の事態にならないとも限らない。

「タオ姉、教えていいの？」

「まあ、最低限の内容であれば」

しかし、少なくとも最悪の事態は回避でき出来たらしい。二人の少女は短いやり取りを終えると、並んで私達に向き合った。

「わたしはベアトリーチェ・ファフロウ」

妹の方が先に名乗り、つば広のとんがり帽子を勢よく真上に放り投げた。すると、帽子で見えなかった部分に、人間にはあるはずのない器官があった。

耳だ。

猫を思わせる三角形のそれは、髪の毛と同じ茶色で、作り物にはない生々しさがあつた。

注目されて恥ずかしいのか、耳はびくびくと動いており、やはり偽物とは思えない。ベアトリーチェさんがぺこりとお辞儀をすると、放り投げた帽子が重力に引かれ、元あつた場所につっぽりと収まり、彼女の猫のような耳を隠してしまう。

「よろしくね！ で、こっちは私のお姉ちゃん」

「姉のタオエン・ファアフロウです」

妹とは対照的に、無表情のまま短く告げた。帽子を外しはしたものの、胸元に抱えて会釈えしやくをする程度で、すぐにまた被り直してしまふ。

やはり、姉の頭部にも獣の耳が見えた。こちらは狐きつねを思わせる尖り耳だったが。

マントのせいで気が付かなかったが、よくよく見れば、尻尾しっぽのようなものも腰の辺りに確認出来る。ベアトリーチェさんのは猫、タオエンさんのは狐のように見える。

別に隠したい訳ではないが、まじまじと注目もされたくない——彼女等にとつては、そういう微妙な部分なのかもしれない。

「私達はお姉ちゃんを追いかけて、いろんな世界を旅して回ってるの」

「我々は三姉妹で、私の上にいる長女の事です」

タオエンさんが姉じゃないの？——という私達の疑問に先回りし、当人が補足してくれた。

「我々が何者なのか、これ以上は言えません。もったいぶっている訳ではなく、知る事であなた方が得られるメリットより、デメリットの方が多いからです」

タオエンさんの淡々とした口調に、他意は感じられない。ただ純粹に、こちらを慮おもんばか

った上での言葉なのだろう。いくら好奇心があっても、危険リスクに見合うだけの見返りがなければ、あえてそれを冒すおかのは愚かだ。正常な判断を出来る人間が取る行為ではない。

そして、私達の中に愚か者はいない。誰もそれ以上、彼女等の正体について触れなかった。

「わたし達はお姉ちゃんに似た反応を見つけて、この世界に来たんだ。そしたら、なんか大変な事になってて」

「私が人除よけをしている間に、ベアトリーチェが状況確認をする段取りだったので…
…どうやら違ったようです」

先ほどから、『ベアトリーチェ』という名前が出る度たびに、やみひめさんと橘たちばなさんが形容けいようしがたい微妙な表情をしているが、それはひとまず置いておく。彼の飼っている猫と同じ名前だが、そのくらいの偶然はあるだろう。

「本来であれば、状況確認が済んだ時点で立ち去らねばなりません。余計な干渉をする事は、誰のためにもなりません。こうして我々が接触している事もそうです」

「でも、そういう訳にもいかない理由があったから。だから、ちょっとだけお手伝い」

そう言つて、ベアトリーチェさんは可愛らしく片目を瞑つぶつて見せた。あざとい。

だが、そのあざとさがいやらしくない。恐らく、本人もそれを判っている。むしろ、それこそが彼女の本当にあざといところなのだろう。

「判りました。貴女方の助力に感謝します」
 「納得しちゃうの?」

私の言葉に、ベアトリーチェさんが意外そうな表情を浮かべる。

「詮索も疑心もお互いのためにならない——でしよう?」

「賢明な判断です」

私の苦笑交じりの対応を、タオエンさんは好意的に受け取ってくれたようだが、本心を言えば、細かい事がどうしてもよくなっているだけだった。ここで彼女等と揉めても、恩を仇で返す結果にしかならない。それは誰も幸せにならない。

やみひめさんと橘さんも、異論はなさそうだ——というより、ベアトリーチェさんが再び橘さんにじゃれついでいて、それどころではないのかもしれない。

やみひめさんがベアトリーチェさんを引きはがそうと絡み合う姿は、その小柄な体格とそれぞれの頭部にある獣の耳の存在のためか、子供の狼と猫がじゃれあっている姿を彷彿とさせた。もつとも、私は狼の子供は見た事がないが。

「タオエンさん」

その光景を私と同じように一歩引いた位置から見ていたタオエンさんに、私は別の質問をする事にした。

「この世界が紅くなっている現象に、何か心当たりはありますか?」

「あの少女と〈ベネダイクト〉が干渉した事による、余波のようなものでしょう。放っておいても、直に元の状態に戻ります」

タオエンさんはそう、事もなげに答えた。〈カタストロ〉の事だけでなく、やみひめさんの能力の事も知っているような口振りに聞こえる。

「〈ベネダイクト〉というのは、私達が戦っていた相手の事ですよ? 私の星では、〈カタストロ〉と呼ばれています」

「〈カタストロ〉……『災厄』ですか。確かに、言い得て妙かもしれませんね。私達の星では『祝福』という意味で呼ばれています」

タオエンさんの言葉に耳を疑う。だがそれは、私に〈カタストロ〉＝消滅現象という認識があるからであって、本来、あれは誰かの願いを叶える存在——つまり『祝福』だろう。けれども、タオエンさん自身はそう思っていないらしい。

「私の星でも度々、目撃されています。しかし、その祝福を受けた者は、必ずしも幸せな結末を迎える訳ではありません。むしろ、見方によっては悲惨です」

大金や権力を得ると周囲が信じられなくなる。

成功者は妬み嫉みの対象となる。

強者になると弱者だった頃の心を忘れる。

恐らく、タオエンさんの世界に現れた〈カタストロ〉によって願いを叶えられた人々は、そういう類たぐいの不幸に見舞われたのだろう。あるいは、クラウドさんのように、本人の意図とは違う叶えられ方をしたのかもしれない。

「過ぎたるは及ばざるが如し——人間には、身の丈に合った幸福というものがあるのでしよう」

タオエンさんの言葉は、悟りきつた賢者というより、無欲な世捨て人を思わせる。見た目通りの年齢なら、あまりに達観しすぎているが、そうならざるを得ない人生を送ってきたのかもしれない。

「そうですね。でも、人間は欲深い生き物ですから……」

より多くを求めてしまう。現状に満足しない。そういう欲求が文明を発達させる原動力となったが、それすら人間にとって良かったとは言いきれない。

これに関しては、考え方は人それぞれだが。

「あなたは、この星の人間ではありませんね」

「名乗っていませんでしたね。私はツバキ・タカチホ。ゼヘナという星から、この地球に来ました」

タオエンさんは、『私の星』という言い方から、私がこの星の人間でないと思ったのだろう。私が地球人なら、『この星』という言い方するのが普通だろうから。

「よく判らない現象が起きて、〈カタストロ〉——貴女あなた方の言う〈ベネダイクト〉と共に、この星に跳ばされてきたんです」

そういう事ですか——と、タオエンさんは納得し、こう続けた。

「——故郷に帰りたいですか？」

「え……？」

唐突な発言に、私は言葉を失った。タオエンさんの口調は、『それは帰りたいでしょう』という同情めいたニュアンスではなく、『帰る手段ならありますよ』と言わんばかりだったからだ。

「実際に見せた方が早そうですね——エクセキュート 頭くちかれよ」

私のリアクションを見て、変わらぬ無表情のまま、タオエンさんは声を発した。特に張った訳ではないが、彼女の声は少し離れた三人にも聞こえたらしく、何事かと此方こちら——正確にはタオエンさん——に視線を向けている。そして、それは私も同様だった。

虚空に青白く光る曲線が走り、それが円を描く。直径約三十センチほどだった円は、広がり、直径約二メートルほどになった。それから円の内部が白く染まり、向こう側が見えなくなる。

「——ツバキさん」

「は、はい！」

妙な緊張状態にあるため、タオエンさんの呼びかけに対して、少しだけ声が裏返ってしまっただけだった。

「あなたの故郷を思い浮かべてください、出来るだけ具体的に。場所でも、思い出でも構いません」

タオエンさんの言う通りに、私はゼヘナの風景を思い出す。思い出と共に、楽しかった事も、嫌だった事も——

すると、真っ白だった円の内部に映像が浮かぶ。広がる荒野と青い空。薄っすらと浮かぶ二つの真昼の月——

しかしそれは映像ではない。

「ツバキ、これって……」

私の隣に並んだやみひめさんが、私の口から聞きたい言葉はこうだろう。

「はい——惑星ゼヘナです」

そう。虚空に浮かぶ円状の平面に映し出されたのは、私の故郷の風景だった。風の感触と、地球とは微妙に違う空気の匂い——これは映像ではない。

この円を潜れば帰れるのだ。

「この空間を紅く染めている現象の影響で、『門』^{ゲート}が開きやすくなっているようです」

「じゃあ、この現象がなくなったら、開けないって事？」

タオエンさんが私に向けて言ったであろう言葉に、ベアトリーチェさんが疑問を投げかけた。

「なんとも言えませんが、今なら安全確実に故郷へ帰れます」

どうですか？——と、タオエンさんの目が告げてくる。いとも容易く帰る手段が用意されてしまったが、彼女の言葉を信じるなら、それは『今』だからだ。この機会を逃せば、私はもう、故郷には帰れないかもしれない。

「ツバキ……」

やみひめさんが私を見つめる。その表情は複雑で、私の帰還を喜びたいけど、それが今生の別れを意味するため、素直に喜べない——そんな風に思うのは、私の思い上がりだろうか。

「……私、ゼーナに帰るのは諦めていました」

それはそうだ。図書館でこの星の科学や技術は調べたが、別の惑星への転移はおろか、惑星間航行も出来ない。地球に跳ばされたのが〈カタストロ〉の仕業しわざであればまだしも、そうでないなら、帰る手段などない。

「やみひめさんのお家でお世話になって、このまま地球で暮らすのもいいかなと思っていました」

この二週間ほどの経験は新鮮だった。文化も街並みも、私の暮らす東方大陸と大した違いはないが、やみひめさんが一緒にいてくれた。私の持っていた『姉』のイメージとは違うが、歳の近い姉妹というのは、きっと実際にはあんな感じなのだろう。

普段は友達のような感覚で、だけど自分を護ってくれる——そんな存在。

それが姉であるなら、やみひめさんは間違いなく、私にとっての姉だった。

「楽しい経験も、たくさんさせてもらいました」

同年代の相手との、同じ屋根の下での生活。街に買い物に行った。たちばな橘さんにはクレ

ーブをちそう馳走してもらった。それが原因で一波乱あったりもしたけど。

地球での私は、〈機獣少女〉じゃない、普通の女の子でいられた。

少し年上だけど、男の子にドキドキしたのも初めてだった。

「だけど、いざこうして帰れるとなったら、帰りたいと思ってる自分がいるんです」

きっと私は、ゼーナでの生活をそれなりに気に入っていたのだろう。

それに、帰らなければならない理由もある。

「何より、私はあの空間で真実を知ってしまいました。だから、余計にです」

私に何が出来るか判らない。すべきなのかも、それすら判らない。

「だけど、何もしなくていいはずがない。」

「だから——」

「私、ゼーナに帰ります」



こうして私は、タオエンさんの開いた『門』ゲートを通して、故郷に帰ってきた。

驚いたのは、私が地球にいた時間と、ゼーナにいなかった時間の不一致だ。地球での滞在日数は八日だったのに、ゼーナでは約二十時間ほどしか経っていなかった。私達〈機獣

少女〉は、MBデバイスの位置情報を常にモニターされている。これは任務中だけなので、

プライバシーに関しては一応、守られている。今回、〈カグツチ〉の反応がモニター出来なくなり、再び反応が確認されるまでの時間が約二十時間だったらしい。

ともあれ——私はひとまず、所属する〈機獣少女〉事務所に顔を出し、事情を説明した。多分に荒唐無稽な話なので、説明には難儀した。一緒に『門』^{ゲート}を通ってきたファフロウ姉妹がいなければ、信じてはもらえなかっただろう。

そう。ベアトリーチェさんとタオエンさんも、ゼーナに来た。やみひめさんをお願いしてくれたのだが、行き先を決めていないというので、了承してくれたのだ。私を送り届けてお別れだと思っていたのだが、私の状況が落ち着くまで付き合ってくれるらしく、今は私の部屋に滞在している。

それからがまた大変だった。位置確認が出来なかった理由を説明するため、〈機獣少女〉協会の東方大陸支部へ出頭した。〈機獣少女〉はアイドル的な側面もあるが、『武力』でもある。人々の生命と財産を護るための力でも、悪用すれば暴力になる。故に、その管理は意外と徹底されている。要は査問会^{さもんかい}だ。

それにもファフロウ姉妹が同行してくれた。〈カグツチ〉が記録してくれていた地球での記録画像と映像も提出済みだが、彼女等の存在なくして、信じてもらう事は困難だっただろう。完全な部外者だが、彼女等は異世界からの訪問者で、客人でもある。本人達からの要望であれば、協会側も立ち合いを拒^{こぼ}んで、彼女等の機嫌を損ねたくはないだろう。

結果的に、二十時間に渡って行方^{ゆくえ}が判らなくなっていた私に対する疑いは晴れ、罰^{ペナルティ}も科されなかった。ファフロウ姉妹だけでなく、他にも口添えがあつた事に加え、私の〈機獣少女〉としての功績を考慮しての措置だと告げられた。

そうして今に至っている。

クラスメイト達にとって私の登校は四日ぶりだが、私にとっては十一日ぶり。しかも、非常に密度の濃い日々だったので、まだゼーナでの日常の感覚が戻っていない。こうして机に座って授業を聞いていても、どこか現実感がない気がする。

この日、私は初めて授業中に居眠りをした。

本調子になるまでは、まだ時間がかかりそうだ。

To be continued

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』サイドストーリー#09をお届け致します。

今回はこのサイトを見てくださっている方にはお馴染みだと思われる二人が登場します。初期の構想———とか妄想では、「機獣少女」として最終決戦に駆け付ける予定でした。ちなみに、アサトがクラウの胸の感触を楽しんでいた疑惑に関しては、ここでは明言しません。読まれた方の判断にお任せします。

でも……「当ててんのよ」って、懂れるシチュエーションですよね!?

あとは地の分で見ている『部品』と『菌車』という表現、『ガンダムUC』のTV版が放送中なので少し迷いましたが、特に珍しい例えでもないので使いました。ダグザさんに敬礼!

では、よきところで謝辞を。

まずはベアトリーチェが使っていた、〈トーレ・アルコ〉の元ネタ製作者である [enigma9641](#) さんに感謝を。チェックもしてくださり、ありがとうございます。この装備は何なのか? これに関しては、今後の続報をお待ちください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。今回もツバキ視点のお話でした。しかも、初の前後編です。長くなるとは思いましたが、まさかの分割———まだまだ『ゾイヤミ』は終わらないぜ!

……嘘です。本当にもうすぐ終わりです。もうちょっとだけ付き合ってください。

2016/6/6 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る